

『大乘莊嚴經論』「述求品」に述べられる幻術の比喻における 「存在するもの」

本 村 耐 樹

1. はじめに

これまでに『大乘莊嚴經論』「述求品」に見られる幻術の比喻に対し、ステイラマティとヴァスバンドゥに解釈の相違が見られることが兵藤 [1991] によって指摘されている。それによれば、両者の解釈の相違は幻術 (māyā) において幻術によって作られたもの (māyākṛta) としての姿形 (ākṛti) の存在を認めるか否かというところにあり、ヴァスバンドゥはそれを認め、ステイラマティは認めない立場を取っている。本稿では、「述求品」の本偈自体においてこの両者の解釈の相違に類似するような、比喻に関する二つの異なった記述が見られることを、幻術の比喻において何が存在するものとされているのかに注目することによって明らかにする。そして、それらの記述がそれぞれ、『瑜伽師地論』の『菩薩地』に見られる vastu と仮説 (prajñapti) に関する記述と、『中辺分別論』に見られる虚妄分別 (abhūtaparikalpa) と迷乱 (bhrānti) の記述に類似するものとして解釈できることを指摘したい。

瑜伽行派の最初期の文献として位置付けられる『瑜伽師地論』『菩薩地』では仮説の拠り所とならない真如 (tathatā) としての vastu の存在が説かれ、一切諸法は本来、言語表現 (abhilāpa) を離れた vastu のみのもの (vastumātra) として実在することが述べられている。しかし凡夫はこのような vastu に対して様々な言語表現を行い、世俗において vastu は仮説の拠り所となっている。そして、このような仮説の拠り所となっている状態にある vastu が nimitta と呼ばれるのである。一方、『中辺分別論』では虚妄分別と迷乱に関して、虚妄分別は虚妄なるが故になぜ存在しないとのみ言わないのかという問いに対して、迷乱が虚妄分別において存在することを根拠に、虚妄分別が単に無なるものではないことが述べられている。このように『菩薩地』では仮説を離れた vastu の実在が説かれ、『中辺分別論』では迷乱の存在を根拠として虚妄分別が単なる無なるものではないことが強調さ

(124) 『大乘莊嚴經論』「述求品」に述べられる幻術の比喻における「存在するもの」(本 村)

れている。そして、この『菩薩地』と『中辺分別論』の相違がスティラマティとヴァスバンドゥの比喻に関する解釈の違いに類似しているのである。以上の考察をはじめるとあって、まずは『菩薩地』における vastu と仮説の構造について確認していきたい。

2. 『菩薩地』における vastu と仮説の構造

『瑜伽師地論』の『菩薩地』「真実義品」は、言葉の拠り所とならない真如としての vastu の実在を次のように説いている。

さて、その菩薩はその深く悟入した法無我に関する智によって、一切諸法が言語表現を離れた自性を持つものであることを如実に知り、いかなる法を、どのようなにも分別しない。そうでなければ、vastu のみ (vastumātra) 真如のみ (tathatāmātra) を把握しない¹⁾。

ここで説かれる菩薩の法無我の智とは、一切諸法を言語表現によって分別しない智であるとされ、菩薩は法無我の智によって対象を一切の言葉を離れたものとして認識することが述べられている。そして言語表現を離れたものとしての対象が vastu, あるいは真如と呼ばれるのである。さらに vastu と言葉の関係について次のように述べられている。

それは例えば、「色」などの名称 (saṃjñā) を持つ、先に示した vastu において、「色」というそのような仮説たる語を本質とする (prajñaptivādātmaka) 法は存在しない。したがって、その「色」などの名称を持つ vastu は、その「色」などというそのような仮説たる語を本質とするものとしては空である。ではその「色」などの名称を持つ vastu において余れるものとは何か。実にそれは「色」というそのような仮説たる語の拠り所である。そしてその二つのものを如実に知る。すなわち、vastu のみ (vastumātra) が存在していることと、vastu のみにおける「色」などの名称は] 仮説にすぎないもの (prajñaptimātra) であるということ²⁾。

この記述から vastu と名称、すなわち、仮説は拠り所と拠るものという関係にあることが分かる。そして法無我の智によって、菩薩は vastu における仮説は空なるものであると理解して、仮説の存在を否定するのであるが、仮説を否定したものとしての vastu そのものは実在すると認識する。すなわち、菩薩にとっては仮説を離れた vastu のみ実在するのである。このような vastu と仮説の構造を踏まえつつ、次に『大乘莊嚴經論』「述求品」に見られる幻術の比喻について考察していきたい。

『大乘莊嚴經論』「述求品」に述べられる幻術の比喩における「存在するもの」(本 村) (125)

3. 「述求品」における幻術の比喩の構造

「述求品」では虚妄分別が幻術に喩えられている。

幻術のように、そのように虚妄分別であることが説かれる。幻術によって作られたもの (māyākṛta) のように、そのように二の迷乱であることが説かれる。(MSA XI.15)

ここでは幻術が虚妄分別に、幻術によって作られたものが二の迷乱³⁾に喩えられている。そして、第16偈では、

そこにおいて、自性 (tadbhāva) が存在しない、[という] その如くに勝義が認められる。一方、それ (自性) の認識が [存在する、という] その如くに世俗諦性が [認められる]。(MSA XI.16)

と述べられている。兵藤 [1991: 10–11] が指摘しているように、この偈の「そこにおいて」をヴァスバンドゥは「幻術によって作られたものにおいて」と解釈している。すなわち、ヴァスバンドゥの解釈では二の迷乱において自性が存在するかしないかが問題となっている。一方、ステイラマティは「そこにおいて」を「幻術において」と理解しており⁴⁾、ステイラマティにとっては虚妄分別において自性が存在するかしないかが問題となっている。この相違は存在するものの解釈の相違にもなる。ステイラマティの解釈では基体としての虚妄分別が存在し、それを拠り所とする二の迷乱そのものが自性であるので、二の迷乱の存在が否定されるのに対して、ヴァスバンドゥの解釈では二の迷乱における自性は否定されるが、二の迷乱自体とその拠り所である虚妄分別の存在は認めていることになる。この相違を踏まえて、次に「述求品」第19偈を見てみる。

また、そこにおいて、その姿形 (ākṛti) は存在するが、自性 (tadbhāva)⁵⁾ は認められない。したがって、有たることと無たることとが幻術等において規定される。(MSA XI.19)

この偈が説くのは、「そこ」つまり幻術において姿形の「有たること」は認められるが、自性については認められないということである⁶⁾。先の偈で幻術に喩えられていた虚妄分別に置き換えれば、先のヴァスバンドゥの解釈と同じく、虚妄分別という基体における二の迷乱の存在が認められていることになり、類似した構造となっていることが分かる。第21偈においても同じ構造が色等における二の顕現性として説かれている。

そのようにここ (色等) に二の顕現性 (dvayābhātā) が存在するが、自性 (tadbhāva) は認められない。したがって、有たることと無たることとは色等において規定される。(MSA XI.21)

(126) 『大乘莊嚴經論』「述求品」に述べられる幻術の比喻における「存在するもの」(本 村)

ここでも色等という基体において二の顕現性が存在することが説かれている。これら第 19・21 偈を踏まえて先の第 16 偈の「そこにおいて」を振り返ると、第 19 偈の「そこにおいて」は「幻術において」と理解できることから、第 16 偈の「そこにおいて」もステイラマティの解釈のように「幻術において」、すなわち「虚妄分別において」と理解する方が適当であると思われる。

このように存在するものという観点から見るとき、第 19・21 偈は、はじめに見た第 15・16 偈と比較すると構造的に異なっていることが分かる⁷⁾。そして第 19・21 偈に明示される、虚妄分別における姿形や二の顕現性の存在が、『中辺分別論』において二の迷乱の存在として注目され、強調されるようになったと考えられる。したがって、最後に『中辺分別論』における虚妄分別と迷乱について見ていくこととする。

4. 『中辺分別論』における虚妄分別と迷乱

『中辺分別論』第 1 章第 4 偈において虚妄分別の存在と非存在について述べられている。

それ故それ(識)が虚妄分別であることが成立した。[識(虚妄分別)は]そのままに存在するのではなく、あらゆる点で存在しないのではない。(MAV I.4abc)

これに対するヴァスバンドゥの註釈は、

なぜならば、顕現が起こっているようにはそのままに存在するのではない。また、あらゆる点で存在しないのでもない。迷乱のみは起こっているからである。ではなぜそれ(識、虚妄分別)は存在しないとのみ考えられないのか。なぜならば、(MAVBh on MAV I.4abc)

とされ、その答えとして、

その滅尽によって解脱があることが認められる。(MAV I.4d)

とされている。このように『中辺分別論』では迷乱の存在によって虚妄分別の存在が強調されているのである。これは「述求品」第 19・21 偈の幻術における姿形の存在や、色等において二の顕現性が存在することと類似するものである。そして、このような虚妄分別の存在がさらに強調されると、『摂大乘論』に見られるような無始時來の基体(dhātu)としてのアーラヤ識の实在となり、依他起性としてのアーラヤ識を迷いと悟りの転換の場とする、所謂、染淨二分依他起性の説となると考えられるのである。

『大乘莊嚴經論』「述求品」に述べられる幻術の比喻における「存在するもの」(本 村) (127)

5. まとめ

以上、『大乘莊嚴經論』「述求品」に見られる幻術の比喻に関して、本偈自体において二つの構造的相違があることを指摘した⁸⁾。一方は、幻術に喩えられる虚妄分別のみが存在し、そこにおける二の迷乱は存在しないとするものであり、他方は、虚妄分別とそこにおける二の迷乱の両者についてその存在を説くものである。そして、前者の構造によって幻術の喩えを理解しているのがスティラマティであり、後者による解釈がヴァスバンドゥである。また、この構造的相違は『菩薩地』における vastu と仮説の構造と、『中辺分別論』における虚妄分別と迷乱の構造の相違とも類似している。したがって、スティラマティは『菩薩地』のような構造が念頭にあって「述求品」の幻術の比喻を解釈し、ヴァスバンドゥは『中辺分別論』のような構造が念頭にあったのであろう。特に、『中辺分別論』が依他起性としての虚妄分別の存在を強調していることは、『撰大乘論』においてアーラヤ識を中心とする、所謂、染淨二分依他起性説に至る過程を考える上で重要であり、「述求品」第 19・21 偈にその発端となるような記述が見られることが明らかとなった。同品第 15・16 偈に見られる幻術の比喻をこの説に会通させようとするのがヴァスバンドゥの解釈なのである。

1) BBh 4.7.

2) BBh 5.4.2.

3) MAVBh において「二」は虚妄分別における主観と客観を意味し、その「迷乱」を伴ったものが虚妄分別であるとされている。したがって「二の迷乱」とは虚妄分別における主観と客観であると考えられる。

4) 兵藤 [1991: 10].

5) ヴァスバンドゥは tadbhāva を象性 (hastitva) と解釈している。

6) 「有たること」とは姿形であり、「無たること」とは自性を意味している。そしてそれらが「幻術等において規定される」とされていることから、「そこにおいて」は「幻術等において」と解釈できるであろう。

7) Matsuda [2006] では「述求品」における幻術の比喻に関して、第 13～18 偈と第 19～29 偈の内容に相違があることが指摘されている。

8) Matsuda [2006: 1192-1193] が指摘しているように、MSA において māyā が虚妄分別に喩えられるものと、rūpa や dharma に喩えられるものがある。マイトレーヤにおいて幻術の比喻に二つの構造があるのは、これら二種の側面を持つ幻術の比喻が未だ統一されていないことを意味すると考えられる。

- (128) 『大乘莊嚴經論』「述求品」に述べられる幻術の比喩における「存在するもの」(本 村)

〈略号〉

BBh: *Bodhisattvabhūmi*: 高橋 [2005: 83–117].

MAV: *Madhyāntavibhāga*: See MAVBh.

MAVBh: *Madhyāntavibhāgabhāṣya*: Nagao [1964].

MSA: *Mahāyānasūtrālaṃkāra* (-kārikā): 舟橋 [2000: 35–69].

〈参考文献〉

Matsuda, Kuninori

2006 “Two Aspects of the Simile of *māyā* in the *Mahāyānasūtrālaṃkāra*.” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 54 (3): 1192 (80)–1196 (84).

Nagao, Gadjin M.

1964 (ed.) *Madhyāntavibhāgabhāṣya: A Buddhist Philosophical Treatise Edited for the First Time from a Sanskrit Manuscript*. Tokyo: Suzuki Research Foundation.

高橋晃一

2005 『『菩薩地』「真実義品」から「撰決択分中菩薩地」への思想展開— vastu 概念を中心として—』インド学仏教学叢書 12, 山喜房仏書林.

兵藤一夫

1991 「三性説における唯識無境の意義 (2)」『大谷学報』70 (4): 1–23.

舟橋尚哉

2000 「『大乘莊嚴經論』の諸問題並びに第 11 章求法品のテキスト校訂」『大谷大学研究年報』52: 1–69.

〈キーワード〉 幻術, 『大乘莊嚴經論』, 「述求品」, 『菩薩地』, 虚妄分別, 迷乱, *māyā*
(名古屋大学大学院博士研究員, 博士 (文学))